私は能の話とさへ言へば型々といふから、私の友人には能に型あるを知るのみで他を顧みない奴だといふ風に私を解釋してる者もある。是れは些か見當が違ふ。無論私は其型なる物を好んでもゐるし尊敬もする。然し外を顧みないのでは無い。

卷頭に載せた「現今の三偉材」の中にも述べた通り元來能の演奏といふものは、言ふ迄もなく歌と樂と舞との三要素から成立つ（時間と空間と人間の三間が必要だらうと誰か言ひはしないか知らと偶然考へた）扨其歌樂舞の三要素言換れば謠曲と囃子と型の三者は申合せて何を現はさうとするかといふと、即ち能の內容脚色である。大別すれば能は內容と形式とに分たれる。然るに其內容なるものは其形式が無暗に洗練を經て居るに拘らず、存外幼稚淺薄なものである。中には殆ど意味をなさぬ程の物もある。

鉢木や七騎落や安宅などは脚色が了解し易くて且つ人情深いもので、誰だつて面白いと言ふ。然し乍ら大會や野守のやうな物、又は唯一首の歌が骨子となつてるだけで外には何にも無い杜若や六浦のやうな物は、第一字句を一々辿つても分らず、無論人情なんかは無しするから少しも面白くないかといふと決して決して左樣ではない。矢張面白いに相違ない。杜若や野守が面白いのは其內容でなく、其形式が面白いので、其謠

の意味でなく文句と節とが面白いとか型が面白いとかいふのである。

然るに一方には攝待などの樣に人情に充ちた小說氣滿々たる物も、舞臺の上では脇の語が面白い位で一向詰らない。乃ち敢ていふ。能は脚色が一貫して人情が籠つてるとかいふ樣な內容の爲めに面白いものとは限らぬが、其形式が整つて居れば——整つて居なくても技巧があれば十分に面白いものであると。

斯ういふ譯で私は先づ第一に能は內容よりも形式に面白味があると斷定する。而して其次に其形式上の三要素ではどれが最も面白いかといふ問題が殘る。而して其印象の淺深、効果の大小からして就中最も面白いのは型だと信ずる。謠や囃子はどうでも構はぬのではない。夫等も隨分面白いが型の方が餘計面白いといふのである。而して其型の內でも私は手堅く引緊つて鮮やかなのを好く、纖麗なのより雄勁なのを好く、香烟縷々といふ趣よりも齒切の良いのが氣持が宜い。斯ういふ處から私の好不好は生じて來る。

今の能樂界で齒切の良い型を見せる者は喜多六平太氏を第一とする。櫻間金太郎氏も少し別な趣ではあるが矢張左樣である。松本長氏にも左樣いふ味がある。梅若萬三郎氏の型は齒切が惡いのではないが私達の齒では嚙みきれない堅さで連續して居る。彼の粘着力は水飴の夫でなく、彼の彈力は生餅の夫でない。彼は實に百錬の鋼鐵のやうなものである。引伸ばす事もヒン曲げる事も又は截斷する事も出來るのであるが、夫に

は少からぬ力を加へねばならぬ。だから一寸見にはどうする事もならぬ堅固さ――窮窟さを感ぜしむる。

扨私は六平太氏の藝風を好むと公言したが、此頃彼の藝に就て一寸考へた事がある。實をいふと彼の能を見る度に其鮮かな齒切の良い型に感心はするが、其感心が少し單調となつて來た。と云ふのはオヤと驚く事が無くなつた、毎度同じ意味で同じ程度に感心する樣に自分は思ふ。斯うなれば甚だ張合が無いもので、是位は當然だとも考へるし、又例の手段で感心させるなァとも考へる。而して夫だけ評價が贅澤になつて、夫位では感心しないぞと云ふ樣な氣も起つて來る。出來ても出來ても其都度當然だと思はれるのは一種の損ではあるまいか。私は之を損だと思ふ。

何故私は斯ういふ事を考へる樣になつたのだらうと思つて見て、實は斯ういふ點に歸着した。即ち之は六平太氏が自分の藝を秘しないからだ、絶えず人心を操るといふ事をせぬからだ、珍らしがらせないからだと斯う考へた。世阿彌は絶えず人心を新たにし絶えず珍らしがらせる事を考へて居たらしい。而して其爲には一度一度に自己に對する評價の變化するのを望んだらしく思はれる。彼は或意味で不評を招くのは後日大喝采を博する牽制運動だと心得て居たらしい。隨分横着な度胸であるが強て不評を招くのでは無論ない。演れる所を演らないで藏つて置くのである。而して此所と思ふ場合には惜しげもなく發揮して見せようといふのである。思つた程面白くなかつたと思はせるのは、其次の時に今度は面白か

つたと思はせる方便であるといふ意味を說いて居る。

總ての時總ての力を盡すといふのも立派な主義であるには相違ない、然し其間に虛實を味はふ餘裕を有するのも亦一の態度であり得ると思ふ六平太氏が毎度其ベストを盡す心掛を間違つてるとは言はぬ、其勇猛心を稱讃するに吝なる者ではない。然し乍ら自分一個の面白味からいへば、少し橫着に餘裕を示して時々はアッと言はせて貰ひたい。本人に言はせたら夫は名人のする事で私共修業中の者は一生懸命にやる外はありませんと論ずるかも知れぬ。成程左樣いへば夫迄で敢て贅澤を言ふ事はない。

一生懸命から思ひ出したか、片山九郎三郎氏の此頃は實に一生懸命であると見受ける、近年大に覺醒して向上慾が燃立つてる彼として當然の事ではあるが、然し其所に注意す可き點が無いでもない。凡そ一生懸命なるものは平常の心掛である可き筈である。夫は敢て舞臺に立つ場合に限る譯のものでは無い。否寧ろ舞臺に立つ時には平常の一生懸命の効果だけが表はれて、一生懸命其物が表はる可きではあるまいと思ふ。舞臺の上に夫が見えるといふのは成功に焦る、急ぎ込んでる、落付きが無いといふ風に考へられるかも知れぬ。

片山に限らず誰でも一生懸命といふ事を平常の持藥として、舞臺上に其效驗を示すといふ工夫が肝要であらうと思ふ。焦思苦慮といふ樣な色が舞臺の上に漂ふのは決して賞す可き事ではない。之は一面からいへば自信を得よといふ註文とも見られる。藝に對する自信が有れば舞臺に立

つて虚心坦懐といふ態度が出來る。自信を得る得ないは矢張り平常の一生懸命の程度如何にある。餘計なおせつかいだが氣づいたまゝを記して置く。

觀世宗家對梅若問題が未だ彼のまゝになつて居るのは、門外漢にも心苦しい次第であるが、之を極めて冷淡に考へて斯ういふ事も思つて見た、即ち藝の上からは之も一の刺戟劑となるのではあるまいか。第一に片山氏が一生懸命になつて居るのは、梅若を向に回したといふ所から起つた發憤も一因をなして居るのではあるまいか。今後は上手に勝つ者は無い時代が來るに相違ない。左樣いふ事まで考へたか否か了らぬが、兎も角も實力で宗家の重さを加へねばならぬ事は知つて居るに相違ない、夫には梅若の樣な好敵手があるのは其奮勵の度をどれだけ強めるか分らない。然し願はくば私交は仲好くして藝の上でのみ競つて貰ひたいものである。

競爭といふ事から最近能樂堂で催ほされた囃子方演能の景況が思ひ泛べられる。梅若の兄弟に實生の二將、夫に櫻間金太郎氏の五人を一組にして催ほされたが、久しく他流仕合をやらなかつた實生が加はつた事も大慶至極として、夫々適役を附けて大に競技せしめた事は近來の痛快事であつた。平常の月並能などで見るよりも裝束からして注意して居た樣であつたが、久々の顔合せではあるし對手として互に不足のない間柄ではあるし、色にこそ見せぬ其意氣込は十分であつたと思ふ。從て平常な

ら翁付で五番といふ能は御馳走過ぎて切は見ない人が多いが、其日は梅若寶生の四人の後を承けて奮闘を試みんとする櫻間の切能を多くの人は辛棒して見物して居た、此樣な現象は全く競技が齎した賜だらうと思ふ。

序ながら其各の出來榮の概略を記し見よう。政吉氏の翁は顏が歪んで居た、型には觀世や下掛のと餘程違つた所があつて面白かつた、之は政吉氏に限らぬが寶生の人は大口でも半切でも着け方が高い。翁の指貫も少し裾高に過ぎる樣に思つた。同じ人の鶴龜は曲入で珍らしかつたが、翁に比して姿勢は著しく立派だつた。萬三郎氏の八島弓流はお手のものとは言ひ乍ら、磯の浪松風ばかりの浦さびしくぞなりにける」など巧いものだつた、鐘引の型も惡い感じはしなかつた、曾て此人の景清を見て「取外し〳〵」の型を過ぎるなァと思つたが八島では其心配はなかつた。後は弓流の所より切が特に面白く見られた。地謠がモ少し緊かりしてたらト夫のみ殘念に思つた。六郎氏の熊野村雨止はお得意物の一つで、屢〻此人の藝に就て云々する私も、之には感心した記憶があるから今度も片唾を呑んで見たが、何故か以前程の情趣は味はえなかつた、何處といつて缺點を指摘する事は出來ないが、醉ふ樣な氣持になれなかつた、長氏の弱法師は此日の一等注意されたものであつたが、手堅くやつたといふだけで矢張り深い味は見出せなかつた。失策は無つたが私は先づ失望したといふ可き氣持になつた。切の金太郎氏の船辨慶は時間の都合で舞を脱いたが、第一其謠ひつ振りからして實に氣持が良つた。前後共に申分

なしの出來だと思ふ。

此日の地謠には一寸考へさせられた。弱法師には九郎翁を地頭とし政吉、桐谷、嘉内、乾三、濤平といふ顔揃ひで、所謂前側連ッレ格の人は一人も加へなかつた。斯ういふ事は月並能では到處見られぬ事で、之も畢竟他流仕合の賜ではあるまいか。夫にしても梅若の地が青年揃とは言ひ乍ら彼の盛大な一派としては甚だ不滿足に思はれたのはどうした物だらう。世間では斯ういふ評判もある、即ち盛んに流行る家の重だつた人は稼ぐ方のお稽古に時間を潰されて、存外内弟子の稽古が行屆きかねるト。之は梅若に對して言つた言葉では無いと思ふけれども、兄弟の人達は一應之を吾事と考へて見ても不都合はあるまいと思ふ。

斯ういふ事を一言も言はせぬのは現今で九郎翁一人かも知れぬ、九郎翁にも二三のお稽古先はある相だが夫でも長、政吉以下の稽古は毫も怠る所は無いといふ話である。但し九郎さんの樣に十萬からの財産があれば私共だつて專心内弟子の養成に盡しますよト言はるれば、私も成程ト引退る外はない。然し今のシテ方に夫程困つてる人は無さ相に思ふがどうであらう、敢て財産調をやつた譯ではないから明らぬが、其生活狀態から考へて大抵の人は中流以上の樣に思はれる。

最後に餘白を借りて一言したい事がある。先日或人が私に對して斯ういふ事を言つた。先日某所で松本長氏に逢つたら、坂元といふ人は頻りに自分の事を讃めてるが、餘り讃められては困るから今度逢つたら左樣

言つて置いて貰ひたいト言つて居た、ト、私は夫は御迷惑さまト答へて置いた。又別の或人は僕は喜之の門に學んでるが、君が大層喜之を贔負にしてくれるのを感謝するト言つた。夫が若し親しい男でゝもあつたら、私は篦棒奴と言つたかも知れない。

私は隨分出鱈目を書いて居る。然し私は曾ても公言して置いた積りだが、自分の思ふ通り以外には決して書いては居ない。從て誰を讃めようと貶さうとして評論を試みるのでは斷じて無い。私は唯解釋したい。而して了解したい。其結果は讃める事にもならうし、又貶す事にもなるであらう、然し夫は私の目的では無い。私は唯能壇の人々を解釋するのが望みである。私に讃められたとか貶されたとかいふ事は、其人達に取て何等の問題では無い筈である。唯私の解釋が間違つてるか否か、了解し得て居るか否かは或は其人達に取つて――考へ樣によりては――問題となり得るかも知れぬ。

若し萬一氣にする人があるなら、私の筆に表はるゝ褒貶を氣にせずに、私の筆で試みる解釋を氣にして貰ひたい。

（大正貳年一月十五日稿）

▲迷つた後で

‖誰の何が見たいか‖

私は曾て或雜誌に能の理想の番組といふ事を書いた事がある。夫は今の第一流の人達に割合に簡單な能を演じて貰ひたいとか、老人株に對しては昔の稽古を見せて貰ふ爲めに餘り出ない能を演つて貰ふとか、所謂柄にある物を夫々割當てるとか、色々の意味で番組を作つて見たのであつた。其時分私は夫を巫山戯て作つたのでは斷じてなかつた。實は私の主張――少し仰山だが――といふ樣なものを含んで居たのであつた。此事に就いては最近に至る迄毫も疑を起さなかつた。

其後演藝倶樂部の新年號に、過去一年間の印象に就て答案を求められた時、私は別に太した苦勞なしに一年間を回想して答を作つた、夫が雜誌の上に載つたのを見ても、尙其選擇に手落があるとは思はなかつた。然るに最近に至つて雜誌「能樂」は見たいと思ふ能に就き曲目と演者を指定して五番を擧げ、且つ此十年間位の內で最面白く見た能を擧げよとの質問を提出した。私は其印刷された往復はがきを手に取つて、一應其質問の意味を了解した後も別に私の心に不安を感じなかつたのみならず之を面白い提案だト一種好奇心を煽てられる樣な微笑を催した。

私は直ちに答案を認めやうと筆を執ると驚いた。私は一つも質問に答へる事が出來ないのに氣附いた時、過去に於て自分が試みた理想の番組と演藝倶樂部の質問に答へたこととの二つが直ぐ考へ浮べられた。私は

「見たしと思ふ番組」といふ欄に梅若萬三郎、喜多六平太、櫻間金太郎と僅かに三人の名を擧げ得たのみで、其曲目も又最も面白かつた能も遂に一つも選び出せなかつた。斯くて私は遺憾乍ら「能樂」記者を滿足せしめる事が出來ないで、其旨を斷つてしまつた。

誰某の何が見たいト云ふ事は平常誰でも口にする言葉である。私も夫を度々口にもし筆にもした。今でも容易に夫が言へ相に思はれてならぬ。芝居の方でも多少役者の特色とか藝風とかいふ事を知つた人々は、誰某の何を見たいト云ふ希望を抱くかと思ふ。能の方でも同じ種類の希望を見物人の方で抱くのは不思議でも何でもない。夫だのに私は見たしと思ふ能に對して其演者も曲目も擧げ得なかつた。之は私が未だ能樂師連の特長といふ樣なものを看取し得ないで居る爲てあらうか。多勢の中で優劣を判別し得ない爲てあらうか、私は種々に考へて見た。

先づ第一に見たしと思ふ能の演者を選べなかつた理由として斯う考へた。最初に兎も角も書きつけた三人は私の好きな人である。(好きな人が第一の上手であるとは言はない)好きな人を先づ擧げて置いて、扨外には見たいと思ふ人はないかといへば決して左樣ではない。又此三人以外の人は下手だといふのでも斷じてない。實生の二將も居る、片山氏も六郎氏も居る。所で縱令能樂師間に判然と技量の等級を付け得るとしても、上手のばかりを——言ひ換ふれば高級の人の能のみを見たいかといふと必ずしも左樣ばかりでもない。現今に於ては未だ第一流の技量で無くて

も將來を慮かりて其現狀を注目したいと思ふ人がある。例へば清久氏の如き其一人である。

茲に於て、上手の能が見たいか、注目す可き人の能が見たいかトと云ふ二問題が生ずる。若し人數を限らなければ双方の人々を列擧するから遺憾なきを得るかも知れぬが、夫が少數に限られると何ういふ方針で選べば宜いか了らなくなる。私は實をいへば「此人の能は見たくない」ト思ふ人は今の所は見當らない。素人のなら何うか判らぬが本職の人々のなら隨分拙いと思つても、此人のは決して見まいと考へた事はない。時間の都合さへ出來れば誰のでも見て居る。唯其間に時間を都合する工夫に自から等差があるのみである。斯ういふ次第で先づ人選は不可能となつた。

扨次に見たい能の曲目をも選べなかつた理由は斯うである。先づ演者を離れて能其物のみに就いて考へると、私は自分で面白い能だ好きな能だト思ふ物を見たいのは當然である。滅多に出ない珍曲、即ち所謂遠い物も見たい。結構脚色の單純な能も見たければ演奏法の極めて六かしい能も見たい。自分で之は能らしき能と思ふ物を見たいと同時に、能らしくないと思ふ物も見たい。而して其等の内で何れが一等見たいかといふ判斷は出來かねる。私は好きなのも嫌ひなのも見たい。見たいといふ感情の色調は區々であるが、兎も角も見たいには相違ない。一言にしていへば總ての能を見たいのである。

夫から演者といふ事を計算に入れて考へると、演者の特長を發揮する曲を見たいと同時に、其不得手と思ふ所の曲も見たい。又此人の此能は一度も見ないからといふので見たく思ふ事もあるし、曾て此人の此能は見たが適材を適處に置いたものと思ふから今一度見たいと思ふ事もある。柄にない筈のが曾て存外面白く出來たから今一度試しに見たいとも思ふし、柄に嵌つてる癖に曾て面白くない事があつたから之も試しに今一度見たいとも思ふ。私は前記の人選難の項に於て、誰の藝も見たいと言つた。曲目選定難の項に於て總ての能を見たいと言つた。斯ういふ事から此項に言つた所を考へると、總ての人の總ての能を見たいといふ事になる。即ち誰の何でも見たいといふ意味である。

最後に面白かつた能を選べなかつた理由も言はねばならぬ。無論面白かつた能はあるにはある。實は夫が少々でない。然し夫に最といふ冠を附けると一寸困る。面白かつたと思ふ能を若干選び出して、扨此内で孰れが最面白かつたかといふ詮議を始めると、第一其比較といふ事が到底出來ない。其面白味たるや盡く違つた趣である。皆夫々獨特の味である。例へば左陣翁の松風と萬三郎氏の野宮と何方が面白かつたか、萬三郎氏の殺生石と六平太氏の烏頭と何方が面白かつたかといふ樣な事になると到底見當がつかぬ。同じ程度の面白さでは無かつたゞらうが、然し又同じ色調でもないのだから比較しようにも方法がない。同じ能を數人が演じた場合、同じ人が色々な能を演じた場合ならば、就中何れが面白かつ

たともいへようが、上手だ好きだと思ふ人達が違つた能を演じた場合には甲乙の論じようが無い、之が一つ。

又、一年間に深く〳〵面白いと思つた能が先づ十番位宛あるとして、何年には何々があつた、其翌年には何々があつたといふ風に列擧して、夫を一緒に考へて見るとどうも新しい程印象の殘り方が濃いから、數年前のに比すると不公平な判明さを以て思ひ起す。少し古くなると唯茫乎と面白かつたと云ふ印象があるのみで、其輪廓は餘程漠然たるものになる。夫が實は今年面白く思つたのより却て強く大なる面白さを其當時感じたのかも判らない。十年前の面白かつた程度と今日面白かつた程度とは到底比べられない。新舊取混ぜて公平に——自分の其當時々々の感想に對して公平に一二を選び出すといふ事は出來相で實は出來ない相談である之が二つ。

今數歩讓つて、否寧ろ數歩盲進して最も面白かつた物として二三番を選定し得たとする。然し其選に洩れた内で又別に二三番を取出しても亦最も面白かつた物と定められない事は無い。先づ之だと定めて見ると屹度其選に洩れたものが急に惜しく捨難くなるに相違ない。之も惜しい、之も捨てられないと數へて見ると、後から〳〵と續々候補者が現はれて來る。而して到頭非常に多くの最面白かつた能が列べ立てられる事になる。即ち最の字は無意義なものになつてしまふ。又考へ方によりては上出來だつたから面白かつたといふ外に、不出來であつても色々の意味で

面白かつた例は澤山ある。見たい能の條に擧げた色々の場合を過去の事例に徵すると、私は總ての能は夫々の意味で皆面白かつたといはねばならぬ。即ち誰の何でも面白かつたといふ事になる。

私は斯ういふ事を散々迷ひ考へた。而して自分に對して、汝は半面に於て誰の何も見たくない。誰の何も面白くなかつたと公言してる樣なものではないかと嘲つた。然し乍ら各種多樣のダイメンションを有する種種の面白味に就て即座に其程度を測定する機械でも發明されない以上、私は何時迄も斯ういふ迷の裡に眠つて居るのであらう。

（大正貳年二月十五日稿）

内に發行者の印を捺印せざる物は無効

大正三年六月十三日印刷
大正三年六月十六日發行

現代文藝叢書
第三十八編（能樂私論）
實價金貳拾五錢

著作者　坂元三郎
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田靜子
印刷者　東京市京橋區月町二十四番地　金子久太郎
印刷所　東京市京橋區月町二十四番地　三協印刷株式會社
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
電話本局五十一　振替口座東京一六一七

鈴木三重吉著

實の桑

(津田青楓裝幀)

此作は何故に空前にも上品な家庭的婦人間に愛讀されたるか？

●女らしいおしみの純潔な家庭生活の描寫●きちんとした素直な涙脆いそしてさつぱりしたおくみは總ての人が求むる純なる日本の女●蠟燭の灯のやうにしみ〴〵した作者獨特の表現……

實價　金九拾錢
送料　金八錢

山路愛山著

思ふがまゝに

(鈴木烏川裝幀)

現代にありて學者文人多しと雖も、思想文章兼至るもの山路愛山氏の如きは稀なり、本書はその近年に於ける傑作中の傑作にかゝるもの、其想の健全なる其筆の流暢自在なる、實にこれ天地不朽の文字なり、請ふ綠蔭濃かなる處、之を繙讀する痛快を味へよ!!

實價　金壹圓
送料　金八錢

關如來著

五色の酒

(南薫造裝幀)

著者は現代美術評論壇の權威なり。先驅者なり。本書收むる所氏が最近の執筆に係るものにして「東山」「本屋町」「宗右衛門町」の三編は文展を中心としたる日本畫家生活の半面を批評して諷刺あり、殊に「發丑文展」「壬子文展の日本畫」の二編は著者眞面目の存するところ近來の大筆たるべし。

實價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

338
233

13

338
233

終